

めて帰った。が然し翌る元日の朝の膳には、その一揃も銚子に結んだ熨斗目正しく、一簾新春の調度らしく持ち出されてあった。

全く十幾年振かで一家は元日の屠蘇を祝ふのである。ぐるりと賑かに膳を取巻いた弟妹の多くは、臍の尾切つて初めての経験である。把りあげた父の杯へ母が持ちそへる銚子の手許を、みな不思議さうに見守るのであった。かくて父母も祝ふた、自分も飲んだ。妹達もソツと済ました。二番目の弟もむづかしい手付きで杯を持った。かうして、多くの弟妹達にも可成りの驚異であり、また最初の経験である屠蘇は目出度く祝ひ終つたのである。父も母もきつと十幾年の昔を想ひ起した事であらふ。久し振りの屠蘇に陶然と酔ふた父は、「酔つた酔つた」とい、機嫌であつた。母の双頬にもほんのりと紅を帯びたのを、殆んど初めて見た私には、殊に何とも言はれぬ喜びであつた。

(大正7年・曲水218)

流觴居雛祭

三月二日の夜は流觴居の雛祭で五時からとのお招きを、遅れて七時頃苔雨君と一緒に伺つた——いつもは先生の机が置かれて、きちんとしてゐるのを、曲水の編集になると我々が伺つて取乱す玄関の隣の六畳間——今夜の雛の間は灯が華やかに、既に先生の傍には、徂春氏とよしを君が白酒の杯の見える膳を前

にきちんと控えてゐた。

床の間に飾られた雛壇は品よく美しい。小さな金屏を背にした上段の内裏雛から二段三段、古風な室町雛、あるかなきかの芥子雛、雨が降つたら菫の花でもさして出さうな小さな傘の相合雛、一さし踊る又平雛：女房の弾く三味線の小さいこと：三段四段に順よく並んだ数多いお道具や人形、悉くつゆ女様の趣味から聚められたもので、下段に見える様々の供え物までみなこの雛壇にふさはしいものである。それに床の右側には父君省亭画伯の金泥に蛤の画短冊と、先生の「雛のものに笥掘るや雪となる」の短冊をいれた細長い幅が懸つて、その下に紺青色の大きい花瓶に紅白の桃と小米桜が活けてある。雛壇の灯は夢のよに瞬く、ふと眼を移すと向ひの障子の笹硝子に映つた雛壇は朧ろ／＼と鏡花の筆のよに美しい。

何時か先生から伺つた、「絲切玉子は水仙の花を見るやうだ」といふ京伝の雛の文句を思ひ出しながら茹玉子をむいてゐると、稲村氏と樹人氏が相次いで見えて、雛の御馳走の並んだ一と間は隙間ない程になつた。そこでさま／＼御話はずむ、先生の前前の白酒の杯はいつまでたつても干されないと、「私はどうも白酒が飲めない、一度飲んで見やうと口へ入れてもどうしても喉から通らない」と、白酒をしみじみ眺めながら先生の話されるのも面白い、下戸の私には却つて白酒の口あたりは懐しい。いつの頃からか知らないが、雛壇の白酒にはぎやまんの器が無くてならないものになつた、絲切り玉子で巧みな観察を見せた京伝は、「ア、びいどろの置き所があぶない／＼」と此の綺